

正徹と耕雲

—— 対抗意識をめぐって ——

稲田利徳

はじめに

義満のあとを継承し、四代將軍となった足利義持は、その周辺に、能楽・田楽などの著名な芸能人を庇護するとともに、五山禪僧・歌僧などとも緊密な交誼をかさねていた。この集英のなかに、南朝の旧臣耕雲と、東福寺の僧正徹の二人の歌僧も各々、重要な位置をしめて活躍していたのである。

歌道をもって、世に対処する、二人の関係をみると、正徹は、老歌人耕雲に対し、かなり対抗的な感情を抱いていたことが察せられる。そして、この対抗意識の分析理解は、正徹の人間性、社会的位置などを鮮明にさせうる、ある視角を提供してくれると思う。

以下、正徹が耕雲にむけた対抗意識の背景を、主として、当時の歌壇の動向の中で把握し、その意味を考察してみたい。

一 資料の検討

先に、正徹は耕雲に対抗意識を抱いていたことを述べたが、実は

二人の関係を示唆する資料は、きわめて稀少で「草根集」と「正徹物語」に、各々一個所みられる程度である。どちらも正徹側の資料であるため、相互の人間感情の認識にあたっては、慎重に処理しなければならぬ。まず「草根集」(巻三)の記事から引用、含味してゆく。

当初、長谷寺に一七日參籠し侍て下向の後、將軍家勝定院殿に参りしに「此度初瀬にていかなる歌をか」と仰せられしに少々申上ナシ(内10)侍る歌の中に、

(1) なげくぞよ夢の四十年もはつせ山をへの鐘の聲をかぞへて
(2) 祈こし法のしるしも此度ぞみつとも思ふふたものすぎ

此詠歌耕雲和尚「さしてきこえず。そのうへむかしよりてと、まり内(10)りてよき歌なし」と申され侍る。後このよしをたづねおほせられ

しかば、ふとうかぶまゝに二首・申されし。
ひき(内15・書)

(3) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもの身に侍(内10・15・書)して

(4) 日くるればあふ人もなしまさきちる嶺の嵐のおと計して

※同頃の秋、六角東洞院と高倉の北のつらの草庵より春日西洞院なる

所にうつりすみ侍る。

(底本は丹鶴義書本により、句読点・濁点は私に付した。他本により主なる校異を施した。書一書院部十七冊本・内10―内閣文庫十冊本・内15) 一同文庫十五冊本)

長谷寺参籠下向の際、將軍家を訪れた正徹は、勝定院(義持)より、長谷寺での詠歌の提出を懇望され、すぐに(1)(2)の二首を示した。それを耳にした耕雲は、この歌が、さして秀逸でない批判するともに、昔より「て」止めの歌で、秀歌はないという見解を開陳した。その後、義持は、正徹に耕雲の意見を伝えられたもようであるが、正徹はその時、即座に、業平(古今集七四七)と俊頼(新古今集五五七)の人口に膾炙された「て」止めの名歌をもって、耕雲の妄言を暴露したことを回想した記事である。この際、正徹の歌が、耕雲の指摘のごとく、陳腐な歌であるかどうか、古来「て」止めの歌に秀歌は存在しなかつたかどうか、ここでは特に論じない。重要なことは、この資料から響いてくる、正徹の耕雲に対する対抗的な感情を感受することにある。この自讃的回想録には、その時の義持や耕雲の反応状況は一言たりとも根拠をとどめていない。が、それだけに、かえって、權威ある老歌人の虚を鋭く突いた、正徹の面目躍如たる姿が鮮かである。

この興味ある逸話の成立年時は、従来、未詳だったが、幸い、新資料「松下集」(国立国会図書館蔵)(注1)の出現により、ほぼ確定付けることができる(注2)。「松下集」(第一冊)には、
応永三十一年九月五日清嚴六角東洞院と高倉との間北畑辻奥草庵有て住給(中略)次の秋八月春日西洞院と町との間南畑に草庵立住給(ふ)
と、正徹の草庵移転を指示する記事がある。これを、先の「草根

集」の※の事項と照合すると、応永三十二年頃にあったことが明瞭になつてこよう。時に、正徹四十五才の、血氣盛りであつたのに対し、耕雲はすでに、八十の齡を重ねた老歌人であつた。

さて、この資料だけで、二人の間に流れる感情を云々するのは、早計であるかもしれないが、次の「正徹物語」の回想録をみるにおよんで、正徹に対抗意識の内在していた可能性は、さらに濃厚となつてこよう。

定家卿、忘恋、

忘れぬやさは忘れけり我が心夢になせとぞいひて別れし

是又(多・神・寛・鳥) ※勝定院の御時予と善雲とに、此哥を

の哥も急度心得がたき哥也。勝定院の御時予と善雲とに、此哥を

御尋ねありしに、兩人申したりし趣かはりたる也。其比落中に沙

汰有りしは、予が申し侍りしは、猶叶ひたると云々。予が申し侍り

しは、人と契りて更にうつりともなし、たゞ夢になしなんといひし

を忘れぬはさらには忘れたる也。

さらんには(多・神) ナシ(寛)

。夢になして忘れよと我といひて別れしがそれを忘れぬはいひし

事を忘れたる也。(中略) 善雲申し侍りしは「忘れぬや」とは人

に対して忘れたるかと問たる心也云々。

(底本は日本古典文学大系の久曾神昇氏蔵東素珊本・校合本は、多1多和文庫・神1神宮文庫・鳥1鳥原松平文庫・静1静嘉堂文庫・国A・B―国立国会図書館蔵・寛1寛文二年版の各本による)

※「勝定院の御時」は、神・多は稱光院とあり、国B・静・鳥は勝光院とあり、各々相違する。稱光院は、後小松帝の次の帝といふことになるが、年時がしっくりせず、また、勝光院なる該当人物も当時みあたらぬ。よって、底本、国A・内閣文庫二本・書

陵部本の本文のごとく、勝定院が妥当と思う。

義持は、定家の難解な歌を、正徹と耕雲に、各々意見を求められたが、両人の見解は相違していた。しかし、落中では、正徹の考えが、より妥当であると沙汰されたという。

ここでも、二人の開陳した解釈の当否はとわれない。看過できないのは、おそらく、応永末年頃にあったこの話を「正徹物語」成立の七十才頃まで、明瞭に記憶を保持し、その自負の念を弟子などに語ってきた事実にある（注3）。

これら稀少な資料を含まれるとき、正徹は將軍義持の足下にあつて、老歌人耕雲に対抗意識をもつて対処していたことが推測されてくる。この想定は、単に私の主観的判断によるだけでなく、松浦貞俊氏も「右の二条ともおそらく同じ頃の出来事であろう」と想像する。正徹の胸中には、老歌人耕雲と拮抗する意識がはたらいていたことと思われる。」（注4）と述べていられる。ただ、この際、耕雲の方でも、正徹に対抗意識を抱いていたかどうかは、耕雲側の資料がみいだされていない現在、断定することは困難である。二人の年齢差は、実に三十余年、そのうえ、耕雲は義持の寵愛を一身に受けていることなど考慮すると、正徹に激しく拮抗する意識は稀薄であつたかもしれない。もっとも「草根集」にみえる、耕雲の正徹の和歌批判には、彼が決して好感をもつて正徹に対処していなかつた雰囲気が感知できるのであるが、ここでは、ひとまず、正徹の耕雲にむけた対抗意識の視角から考察を進めてゆきたい。

さて、先の正徹の対抗意識の内実とその背景を形成しているものはなにか。そこに、自分より高い地位、厚い寵愛を受けている者に対する、嫉妬の感情、あるいは、將軍家という公的な場を中核とする

名譽心——換言すれば、正徹の個人的感情、欲求の存したことは認めざるをえない。しかし、さらに、正徹と義持との交誼過程、耕雲の経歴と当時の社会的位置を辿るとき、単に個人的感情だけでは裁断できないものがあり、当時の歌壇の動向を背景として展開されているのではないかと臆測されてくるのである。

二 正徹と將軍義持

一介の野昏歌人正徹が、天下の將軍義持に、いつ、いかなる因縁で接近するようになったかは、必ずしも明確でない。「草根集」（卷一）によると、応永二十一年四月、細川道視（満元）家で「頓證寺法楽千首」が催されているが、従来、この法楽歌会に参加した歌人、並びに詠歌は、「草根集」に所収した正徹の歌、六十首以外は不明であつた。ところが、最近調査した、金刀比羅宮社務所蔵「松山千首短冊」（現存五十七枚）は、この各歌人の自筆、奉納短冊なることが判明した（注5）。この資料は、早く「古今讃岐名勝図絵」（注6）に引用され、その添書に、

松山千首短冊今存五十七枚征夷大將軍内大臣従一位源朝臣義持上と記録してある。義持の官位（注7）からみても、この添書は、後世の人の付加でなく、その当時から、千首短冊と共に頓証寺に奉納されていたものを「古今讃岐名勝図絵」の編者あたりがみつつけ、書きとどめてくれていたものと考えられる（但し、この添書）。これからみると「頓證寺法楽千首」は、細川満元の勸進によるものかもしれないが、同時に、義持も深く関与していたことになる。すでに、この頃、直接面識をもたぬまでも、正徹の名は、義持の耳に入っていた可能性がでてくる。同様に、その年の十二月「頓證寺法楽百首」

(続類從卷三八四)の歌会にも正徹は出座しているが、「後鑑」所収「頓證寺法楽和歌殿」にいうところの、

頓證寺額并御法楽百首和歌事。周防入道依_レ申沙汰。御願之次第殊以珍重候。就_レ中額事。室_レ殿御執奏之間。依_レ被_レ染_二宸筆_一。被_レ別_二進御製候_一(以下略)

は、多分、この時の法楽歌に該当するものである。ここでも、義持は関与していることになる。

このように、直接面識をもっていたかどうかを裏付ける資料には遭遇していないが、少なくとも応永二十一年頃、正徹の名は、すでに義持の知るところとなっていたと推定される。

「正徹物語」には、さらに、懐紙の重ね具合をめぐり、次の追想を綴っている。

勝定院の御時、飛鳥井殿、官は中納言、位次は正二位にて侍りしを、岩栖院の官領にて侍りし上に重ね侍りしかば、既天下の奉行たる上は飛鳥井殿よりも上に重ねべきよし仰られしかども、官領は参議に進ぜらるゝ間、黄門より上には重ねべからざるよし申して、終に承引なかりける也。

これは、多分、義持の面前に、飛鳥井殿(雅縁)と岩栖院(満元)とが出座した歌会での出来事であつたろう。二人の官位記載を信用すれば、応永十九年から二十八年頃の話となるが(注8)、正徹自身の直接体験か、あるいは伝聞によるものか判断としない面もあるので、参考資料として提出するにとどめる。

二人の関係を示唆する資料は、以上辿ってきたものと、先に引用した「草根集」「正徹物語」程度であるが、次に、正徹が義持に接近した契機をさぐってみたい。

この点に関し、二人の媒介役となつたのは、細川、満元ではなかつたかという推定が井上宗雄氏によって提示されているが(注9)、義持と満元、満元と正徹の各々の親密な関係からして、その可能性は十分認められる。政治上では、管領として、常に義持と接触していた満元は、さらに、義持の供をして南都に下向(兼宣公記・応永(廿四・八・廿四) 島根県日御崎神社にも参詣している

(後鑑所収(日御崎文書)。一方、義持自身満元邸を訪れることもしばしばあつた(満濟准后日記(応永廿五・正・廿三)。満元の死報に接した義持は「以外、御周章」(満濟准后日記(応永三十・三・十六))の御様子であつたと伝えられる。この親密な関係からすると「此管領和歌ノ奇異他也」(醍醐校葉抄)と批判されるほど、歌道に陶醉した満元のことである、かねて知遇を得ていた歌僧正徹を、義持にひきあわせた経路は、自から鮮明になつてくる。

正徹は、すでに、応永二十一年頃(頓證寺法楽歌)、満元邸に出入し、彼と一応の面識を得ていた。しかし、個人的に、より親密になり、歌道のことを話しあうようになったのは、次の記事から判断するに、それより数年後のようである。すなわち、満元の三十三回忌に際し、

七とせは身にそふ影とともなひし人の世てらす法の灯火

岩栖院に歌道によりて七十(ヶ敷)年のほとそひ侍しことなり(「草根集」巻十四。※尊経閣文庫本・松平文庫) (内閣文庫本など七年とある。この方がよい。

の歌と自註をとどめているが、満元の逝去は、応永三十三年十月である。正徹が、その時まで交際を持続していたものとみて、二人の関係は、死没の七年前の応永二十六、七年頃から成就していたこと

になる。ちょうど、この頃は、正徹が、ある傷心を抱き、美濃への旅を試み、帰洛した頃にあたる（「なぐさめ草」参照）。同時に、満元を媒介とする、正徹の將軍家への接近もこの頃にはたされたことにならう。応永二十六、七年という時期に、正徹が義持に接近しているとするれば、後述する、冷泉家との関係からみても、かなり重要な意味をもっている。そのことが、同時に、耕雲への對抗意識の背景を示唆しているのであるが、これを述べる前に、耕雲と義持との関係に視点を移してみる。

三 耕雲と將軍義持

耕雲は、祖父文貞公（師賢）に従って、南朝に勤仕し、宗良親王の企画された「新葉集」の成立に対して、援助の労を惜まなかった。かかる南朝公卿たる前歴をもつ耕雲が、いかなる因縁で、こともあるうに、足利義持の知遇を得て、信頼されるようになったかは、興味ある問題を内包している。しかし、すでに出家の身となり、政治的なかわりもない一禪僧であった耕雲を、その卓越した歌道の名声のゆえに、義持が厚遇したと考えれば、この疑問は、それほど重視すべき性格のものでないかもしれない。耕雲と義持との交情を示唆する資料は、断片的なものではあるが、相当数認められる。そのうち、最も早い時期のものは、応永二十年頃のもので、義持が耕雲の「孟子談義」を聴聞した記事がそれである。

（満濟准后日記・応永二十・四）廿九・日記・応永二十・五・四）。「ただ」教言卿記」（十二・廿四）に、耕雲が、足利義満の歌に加點した記事がみえるのを勘案すると、義持との関係も、応永二十年以前から成就していたと考えられる。正徹と比較すれば、随分、早くから知遇を得ていることになるが、現存する資料によって認知できる二人の関係は、やはり、耕雲

の学問、特に和歌を媒介として親密化されている。例えば、耕雲は、北野社に十五首歌を、為尹、宋雅とともに奉納（書陵部藏）（注10）仙洞御会に和歌を詠進（兼宣公記・応永廿六・三・廿八）、十三人延臣の詠歌に合點（康富記・応永廿九・十二・廿一）するなど、歌道における権威ぶりを発揮しているが、これらの行為は、どれも義持の台命によって行われている。一方、応永二十四年の義持の奈良下向に従って、東大寺で詠歌しており（後鑑所引の和）、「耕雲紀行」（東大史料）（注11）によると州旧跡幽考（編纂所蔵）（注11）によると義持の伊勢參宮にも具行、出雲の日御崎（後鑑所引の）（日御崎文書）、天の橋立（真愚稿）にも随行している。しかし、この場合でも、耕雲のはたした役割は、寺々への法薬の奉納にかかわることであり、歌道から逸脱した場での活躍ではない。耕雲は、また、義持のために、百首歌を詠進したり（雲窓遺語）（注12）「耕雲千首」（書陵部藏）（注13）を書き与えている。書写本の提供は、和歌の領域にとどまらず、「親長卿記」（文明十四・六・十七）には、義持の委囑により「轉書」を書写した由がみえ、「御成敗式目追加」（注14）「源氏物語」（注15）「原中最秘抄」（注16）「仙源抄」（注17）「源氏小鑑」（注18）なども、各々の語本の奥書、端書によって、耕雲が義持の命によって、書写、進上したことになる。まさに献身的な奉仕である。このように、義持が、耕雲と接触する面は、学問、歌道の範囲に限定されるのであるが、その交誼は、単に形式的、儀礼的なものではなかった。花山院忠定が没し、嗣子なきゆえをもって、家系断絶の危機に瀕した時、義持は、耕雲の麴子をもって相続せしめ、その難を救っている（看聞御記、応永廿三・八・十五・十一・九）。他方、耕雲

は、義持に菓子なきを、子の日の祝い歌でもって將軍をなぐさめる

など(滿濟准后日記 応永卅三・正・十一)その交情は、親密で濃やかであった。従来、耕雲と義持との関係は、先学の諸論文(注19)の端々にも

触れてはあるが、ここにそれを集成し、かつ、新しい資料も追加し、その過程を便宜的にまとめて表示しておくことと次表のようになる。

年 月 日	関 係	記 事	資 料	出 所・所 蔵
(1) 応永十四年十二月二十四日	足利義滿の歌に長點を加える。		教言卿記	大日本史料七の九
(2) 応永二十年 四月二十九日 五月 四日	義持、耕雲の「孟子」談義をきく。		滿濟准后日記	統類從補遺
(3) 応永二十一年頃か	義持のために、百首和歌を詠進す。		雲窓齋語	穂久邇文庫蔵か
(4) 応永二十二年二月二十三日	義持の命により北野社へ十五首歌を奉納す。		詠十五首和歌	書陵部蔵
(5) 応永二十二年二月 四日	足利滿詮郎での七百番歌合の判者となる。		滿濟准后日記	
(6) 応永二十三年八月十五日	花山院忠定が没し、嗣子なきため耕雲の猶子を以て相続せしめる。		看聞御記	統類從補遺
(7) 応永二十四年八月九日	義持の奈良下向に従い、東大寺で詠歌。		和州旧跡幽考	後鑑
(8) 応永二十五年九月	義持の伊勢參宮に従う。		耕雲紀行	史料編纂所蔵
(9) 応永二十五年春	「耕雲千首」を義持の命により書写す。		諸家藏書目錄	書陵部蔵
(10) 応永二十六年正月 十四日	義持、耕雲のいる南禅寺を訪問す。		滿濟准后日記	
(11) 応永二十六年二月二十三日	義持の北野參籠に耕雲も参加。		滿濟准后日記	
(12) 応永二十六年三月二十八日	仙洞御会に、義持の命により和歌を詠進す。		兼宣公記	内閣文庫他
(13) 応永二十七年五月二十六日	義持に従い、出雲の国日御崎で、和歌を詠じ奉納。		日御崎文書	後鑑
(14) 応永二十九年十二月二日	義持の命により、十三人の廷臣の歌に合點す。		康富記	史料大成
(15) 応永三十二年十一月二十四日	義持の北野參籠に際し、耕雲は、会所に伺候。		滿濟准后日記	
(16) 応永三十三年正月十一日	義持の契子なきを耕雲は、子の日の祝い歌でなぐさめる。		滿濟准后日記	
(17) 応永三十三年四月三日	義持は耕雲に、和歌山の粉河寺の戸帳に詞を書かしめた。		滿濟准后日記	
(18) 年時不明	「源経氏集」に義持の命により円点を加える。		源経氏集	史料編纂所蔵
(19) 年時不明	義持の供をして、天の橋立であそぶ。		真愚稿	五山文学全集(補注)
義持の命による書写本	・ 鞠の書・御成敗式目追加・耕雲千首・源氏物語・原中最秘抄 ・ 仙源抄・源氏小鑑			

(補注) 東大史料編纂所蔵「源経氏集」は、現在は題簽がないが「新後拾遺集」「新統古今集」の経氏とある歌と一致するとのこと(井上宗雄氏「中世歌壇史の研究南北朝」)。縦二十三糎、横十五・七糎の胡蝶装の写本一冊で、奥に「依台命之重加圓点訖 樹下散人耕雲」とある。

四 正徹と耕雲の対抗意識の背景

正徹の耕雲に向けた対抗意識を認識するに際し、正徹と義持、および、義持と耕雲と、各々、別個に説明を試みてきた。それは二人の対立感情が、常に、將軍義持を媒体として展開されている気配が感ぜられたためである。現存資料の範囲による限り、義持の耕雲に対する信寵ぶりは、正徹におけるよりも、時期的にも早く、はるかに親密であった。応永二十六、七年頃、正徹が義持への接近をはたしたころ、すでに、耕雲の歌道における社会的名声、とりわけ、義持足下にしめる位置は、確固たるものがあつた。そのため、正徹の対抗意識のなかに、自分よりはるかに信頼されている者に対する、嫉妬の念が燦るとともに將軍家を足場に、時の歌道權威者を批判し、逆に自己を高揚せんとする功名心が混入していたことは認めざるをえない。しかし、さらに、当時の歌壇の動向のなかで、この対抗意識をとらえてみると、そこには、単に個人的感情だけに起因するだけでなく、冷泉家を意識して、世に対処する、正徹の果敢な姿が彷彿としてくるのである。

応永期の歌壇は、冷泉派と二条派の対立感情が、再び激化した時期でもある。正徹の師にあたる今川了俊は、すでに、応永十年頃から、冷泉為尹を擁護し、二条派批判の旗をかかげていた(注20)。

義持が、応永二十一年二月、為尹、宋雅、耕雲の三歌人をして、北野社に「詠十五首和歌」を奉納せしめているのは、当時の歌壇を知るうえで、きわめて示唆的である。おそらく、先の三歌人こそ、応永二十年代の歌壇の第一人者と目されていたのであろう。為尹は冷泉家を、宋雅は飛鳥井家を、各々代表する歌人であることを思うと、

南朝旧臣の前歴をもつ耕雲は、他の歌人達からいかなる立場にある歌人としての位置付を受けていたか。なるほど、彼の歌論書「耕雲口伝」は「二条伝統派に對抗し彼独自の道としての歌論を樹立」(注21)「秘事を排し用語の自由を認め、傳統的な二條家の歌風に反対の立場にある」(注22)と規定される面も存するかもしれないが、耕雲その人を「反二条派の人々」(注23)の系列に加えるのはどうであろうか。その歌論や歌歌に、いささか二条派的な臭みを脱した点があつたとしても、二条派の系列に立つ宗良親王(注24)との関連からしても、耕雲の二条派的血脈は争えない事実である。この際、重要なことは、耕雲の意識の内面ではなく、他の歌人達からみた耕雲の位置であり、正徹なども、耕雲は二条派の血脈をひく歌人だとして、接していたのではなからうか。二条派系列の歌人——そこまで規定しないまでも、少なくとも、冷泉派とは異端の歌人として、耕雲は存在していたのであろう(注25)。

義持は、決して、冷泉派を排斥してはいない。為尹は、応永二十一年、義持の命により、北野社に十五首歌を奉納、翌年八月、「千首和歌」(為尹千首)(注26)を詠進している。また、応永二十三年五月、冷泉家は、赤松満祐管領の細川庄の還付を受けたが(冷泉族譜)(注27)、これも義持の盡力によるものであつた。

正徹が、將軍家へ接近したころを、先の考証のごとく、応永二十六年、七年とすれば、この時期が、冷泉家にとって、衰退への危機をはらんでいたことは留意せねばならない。後小松院歌壇の第一人者でもあつた、為尹は、「歌道衰微之基歟、不便々々」(御記)と、後崇光院をして慨嘆せしめながら、応永二十四年正月二十五日に逝去

している。また、二条派を、きびしく論難し、側面から冷泉派擁護を持続してきた今川了俊も、すでに、応永二十五年以前に死没したもようである(注28)。為尹の子息為之はいまだ脆弱である。「なぐさめ草」の旅行以後、將軍家に立った正徹の脳裡を去來するものは、偉大な冷泉派の頭首、為尹、了俊を、相次いで喪失した寂寥の念とともに、これからは、自己自身が、冷泉派の支柱とならねばという強い決意ではなかつたらうか。

当時、四十才前後の正徹が、背のびしてまでも、耕雲に対抗意識を燃やした背景には、こういった歌壇の状況が、底流をなしていたのではなかるうか。

さらに、この対抗感情を促進させた要因の一つに、義持の諸人待遇法が考えられる。「上杉憲実記」(注29)によると、義持を評し「寛仁ナル生質ナレハ」としているが、確かに、彼は、芸能や学道の人に処するに際し、極端な偏愛主義におちいつていない。次期將軍、義教などと比較すれば、そのことは、いっそう鮮やかである。

例えば、本論考の最初に引用した「草根集」「正徹物語」の記事にみえる義持の態度を反芻してみよう。前者で、義持は、正徹の和歌を尋問し、それを耕雲に告げ、耕雲の批判をさらに正徹に告げるという、交互、対等な態度を示し、後者でも、同一の定家の歌を、各々、二人に解釈を求めている。この待遇法は当時盛行した宗論などの影響(「事典義持は禪宗」によるものかもしれないが、陳情する側では、自然、競争的にならざるをえない。義持が意識的に、かかる待遇法を施行したかどうかは知るよしもないが、すでに幾度か触れた、例の北野社奉納歌で、当代の代表的歌人、耕雲、為尹、宋雅を並列せしめたり、また、自らの道号、頭山の詭を、時の代表

的禪僧、仲芳円伊(嫩室漫稿)(注30)・岐陽方秀(不二遺稿)(注31)・惟肖得嚴(東海瓊垂集)(注32)の三者をして作らしめた資料をひろってみると、義持は、かかる待遇法を頼用したかのようである。

その晩年には、二条・冷泉などの流派に対し「まったくその流れには目をかくべからず」(正徹)とか「尤冷泉家の随一末葉なれども我は何れもうるさく侍り、下りはてたる家をば尊まず」(返答)(注33)など、狭い範圍にひきこもる流派意識を極力排斥し、批判的態度で処した正徹ではあったが(但し、この言葉も)、四十才前後にあっては、やはり、冷泉派を意識し、それに荷担したのであろう。

以上のように、正徹の耕雲批判は、彼の単なる個人的な嫉妬や虚榮心を超えて、冷泉家を強く意識し、展開されたであろうこと、さらに、それに拍車をかけたのが、義持の宗論的諸人待遇法、とでも呼ぶべきものであったと考えられるのである。例の定家の和歌解釈をめぐり「其比洛中に沙汰ありしは、予が申し侍りしは、猶叶ひたると云々」(正徹)の回想は、二人の関係が、洛中の歌人達にも、広く認められていた背景を暗示するとともに、その対立關係が、単なる個人的なものでなかつたことにも触れてくる。

「草根集」には、応永期の正徹の足跡がほとんど記録されていないこともあって、正徹と義持とのこれ以降の關係は察知できないが、義持の没年までその交誼は持続されたとみてよいであろう。この義持との交情は、臆測をたくましくすれば、正徹の生涯に、大きな波紋をなげかけた、重大な事件に連結してくるかもしれない。重大な事件とは「松下集」に「備中朝小田庄とて庵領あり。普賢院殿の御時ゆへなくめしはなされ侍り」とあることより、あかるみにてた

義教による正徹の草庵領没取事件である。この事件に關しては、既に拙稿をもっているので（注34）、ここでは触れないが、正徹の義持への接近のなかに、その原因があったのではなかったか。もちろん、没取事件の直接原因は、現在不明であるが、野情歌人正徹が、將軍家へ出入することがなかったなら、かかる事件の勃発により、憂き目にあうこともなかったらう。この意味でも、正徹の耕雲への対抗意識は、微妙な問題をはらんでいる。

おわりに

和歌の発想が生活意識に密着していないこともあって、正徹の人間性を、和歌そのものからとらえるのは、きわめて困難である。残された資料の制約もあろうが、伝記研究なるものは、単なる資料羅列による対象描写でなく、存在としての人間——歴史的人間存在を動的に把握することへの志向が期待される。

この観点に立脚すると、先の正徹の耕雲批判は、ある恰好の視角を提供している。人間が折に触れてもらさず、感想・批判は、それ自体、単なる固着した言語表現にすぎないが、実は、その言葉には、その人間のよってたつ、全人格的な、広範囲で独自の人間存在が凝集しているものである。

先に考察した正徹の耕雲への対抗意識にしても単なる個人的な感情だけでなく、危機に直面している冷泉家を念頭においての行動であった可能性が十分認められる。また同時に、正徹の積極的、意欲的な姿勢、勝気で、排他的な性格を刹那ではあるが、鮮明化できる。かかる人間性が、陳腐な伝統的表現にあきたらず、斬新な表現を推進した正徹と、どのように関連してくるかは、早急には判断で

きないが、少なくとも示唆的である。

なお、正徹の耕雲への対抗意識には、兩者の宗教的な問題や、歌論や歌自体の相違などによるのではないかとの意見もあるが、現段階では、この方面に、対抗意識の立脚点があったとは考えていない。

注1 この資料は、井上宗雄氏の発見にかかり「正広および招月庵の門流について」（文学・語学第28号）に紹介された。

2 この年時考証は、拙稿「正徹の伝記をめぐる二、三の問題」（国文学攷34号）にも触れたことがある。

3 「正徹物語」の成立は、宝徳二年、正徹七十歳頃とする説（松原三夫氏「招月庵正徹伝攷抄」水鏡昭10（13））や、文安五年、六十八歳とする説（細谷直樹氏「正徹物語成立年代考」国語國文昭26・7）などあるが、いずれにしても晩年のことである。

4 松浦貞俊氏「正徹」（日本歌人講座、中世の歌人Ⅱの三三九頁）

5 この自筆短冊は、学界に知られていなかった新資料であるが「草根集」（巻一）の正徹の歌と一致するものがあり、その成立年時が判明した。なお、この資料は、田岡穆氏「崇徳天皇に關する金刀比羅宮の宝物」（「ことひら」昭和41年新春号）に少し触れてあるが、社務所からの依頼により、別に拙稿を用意する予定である。

6 「讃岐國名勝園會」（嘉永六年他）（梶原藍水編）を、後に梶原竹軒が補訂したもの。但し、この記事は、補訂掲載の箇所ではないもようである。

7 「公卿補任」によると、義持が、内大臣従一位であったのは

応永十七年から二十六年までである。

8 細川満元は、応永十九年から応永二十八年まで管領。雅縁は「公卿補任」によると、応永五年正月叙正三位、同年三月任權中納言叙従二位。以後不明。「正徹物語」の正二位は従二位の誤りかもしれない。古典文学大系頭注参照。

9 『中世歌壇史の研究室町前期』

10 題簽に「詠十五首和歌為兼卿卅三首耕雲・宋雅・為尹」とある。縦二十八・六糶・横二十一・四糶の袋綴の写本一冊。

11 小杉楓邸氏旧蔵で、縦二十三・二糶・横十六・五糶の胡蝶装写本一冊。墨付二十七枚の耕雲自筆本と伝えられるもの。

12 檜崎宗重氏「花山院長親自筆本、雲窓牋語に就て」(国語と国文学昭29・8)。この自筆原本は、現在、穂久邇文庫に蔵せられているか。(『私家集伝本書目』参照)。

13 書陵部蔵「諸家蔵書目録」(一〇二・一七〇)にある、平瀬龜之家の目録として「耕雲千首一冊」に「応永廿五年春依台命書写之者也 耕雲山人明魏判」の奥書がある由、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究南北朝』。

14 類従本奥書など。

15 高松宮家蔵「桐壺」巻奥書など(『源氏物語大成』巻七、二二二頁)。

16 類従本・松浦家旧蔵本の奥書など(同前、二二二頁)。

17 和田英松氏蔵本・彰考館本など奥書(同前二二二頁)(和田英松氏『皇室御撰の研究』二二二頁―二二三頁)。

18 書陵部蔵本・広島文理大学旧蔵本の冒頭に耕雲が義持に進上した由がみえる。なお、寺本直彦氏「源氏小鏡作者説の吟味―主として耕雲撰説について―」(国語と国文学昭41・7)参照。

19 耕雲に關しては、岩佐正氏「耕雲小論」(国語と国文学昭9

・1・2)・岩橋小歌太氏「耕雲明魏」(国語と国文学昭28

11)に各々詳細な考察がある。

20 応永十年「二言抄」(和歌所への不審条々)をあらわし、冷泉派擁護の第一声をはなつ。

21 池田富蔵氏「花山院長親とその歌学思想」(福岡学芸大学紀要第十号)。

22 次田香澄氏「為兼集の性格と意義」(国語国文昭38・8)

23 齊藤清徳氏「中世日本文学」二五三頁。

24 宗良親王は、二条為定に師事し、二条歌風を学んだ。また、母は二条為世の女、贈従三位為子であった。

25 小原幹雄氏「中世後期に於ける藤原為兼評」(鳥根大学論集、第十六号)参照。

26 類従本・三手文庫本など奥書。

27 史籍雜纂(一四一頁)。

28 了俊の没年は通説では、応永二十七年とされるが、応永二十年七月の、正徹の「なぐさめ草」に「故伊予守入道了俊在世の時」とあり、これ以前に没したとみる方が妥当であろう。松原三夫氏前掲論文・荒木尙氏「今川了俊覚書」法文論叢文科編第8号など参照。

29 統類従本・二十輯上、二二三頁。

30 31 五山文学全集所収

32 東大史料編纂所蔵

33 岩波文庫「連歌論集上」三一六―三一七頁。

34 拙稿「正徹の謫居説と草庵領没収事件の考察」(中世文芸30号)

なお、本稿は、昭和四十一年度全国大学国語国文学会秋季大会(於山形大学)で発表したものに手を加えたものである。(昭和四十二年・三・二十四) 一 広島大学大学院学生一